



広報 あひな

市章

発行・海老名市役所・海老名市国分155/編集・秘書広報課/電話・31-2111(代)/〒243-04

世帯と人口

昭和59年 2月1日
世帯 26,848世帯 (+90)
人口 88,238人 (+264)
男 45,296人 女 42,942人

江戸末期以前の話を
池田正一郎さん(国分、71歳)

昔話は、民話や伝説の類なら問題はありませんが、比較的最近起こった事実をもとに書かれたものは、その当事者だった人の子孫が健在である場合が多く、内容によってはその人々によって迷惑になることも少な



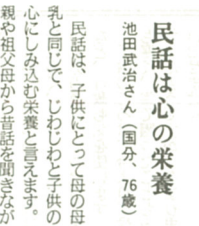
「海老名むかしはなし」(順番は五十番順)

なくありません。しかし、かと言ってそれを曲げて書けば、以後の人々にいってその文章が真実と誤解を招いてしまうことだってあります。



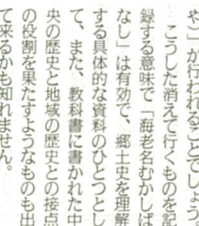
民話は心の栄養
池田武治さん(国分、76歳)

民話は、子供にとって母の母乳と同じで、じわじわと子供の心にしみ込む栄養と言えます。親や祖父から昔話を聞きながら、人の苦しみや自分の苦しみに置き換えて理解できるような子供として、情操の陶冶(とうがい)をうけてほしい。



行事のいわれなど
宇田 浩さん(中河内、69歳)

新たに転入された市民が多いので、こうした人々にこの地域

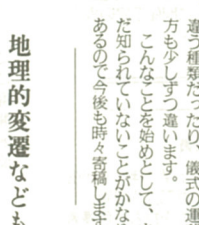


「海老名むかしはなし」のコーナーは、最初のころは、紙面に変化を与えるという役割から発展して、その後思いもかけない使命と期待を担うことになったのである。

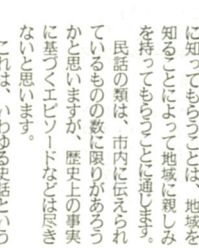


地理的変遷なども
浜田二郎さん(本郷、65歳)

市に関する昔話を多くの人



「海老名むかしはなし」のコーナーは、最初のころは、紙面に変化を与えるという役割から発展して、その後思いもかけない使命と期待を担うことになったのである。



海老名むかしはなし

語り継ぐ「ついで」へ

地域の昔話は未来への文化遺産

53年10月から連載
毎号の本紙に連載されている「海老名むかしはなし」のコーナーを存続しようか。伝説、実話、不思議な体験、今ではもう失われた習俗、古道の紀行など興味深い話が市民の寄稿や広報担当者の取材文で紹介されています。このコーナーは、昭和五十三年十月から連載を開始し、今年で六年目。むすかしい記事が並ぶ広報紙の紙面に少しはもたらが、楽しさ、温かみを出そう

口伝えの遺産守る
こうした昔話を収集する試みは市内では他にほとんど例がありません。テレビに代表される映像文化の隆盛と、核家族化が進む現代にあって、お年寄りの昔話に耳を傾ける子供は少なく、また、語る場を失ったお年寄りは、それを後代に伝えることなりの世を去って行くのでした。こんな状態の中で、定期的にこうした昔話を掲載し、文字に

地域を知る材料に
消えて行くものの保存とともに、もついで予期しなかった役割も、最近の急速な宅地開発で海老名市の新たな市民となった方が全人口の大半を占める現在、この「海老名むかしはなし」

「海老名むかしはなし」のコーナーは、最初のころは、紙面に変化を与えるという役割から発展して、その後思いもかけない使命と期待を担うことになったのである。

と始められたこのコーナーには本号の掲載分まで数えて八十六話もの寄稿や情報提供による昔話が登場しました。市民のみならず、市民のみなさんにかなりよく読まれているという感を得ているこのコーナーは、最初の紙面に変化を与えるという役割から発展して、その後思いもかけない使命と期待を担うことになったのである。

「こんなに狭い海老名市という限定された地域に伝わる昔話など市民のみなさんが読んでくれるだろうか」という不安もありましたが、ともかく始められた連載は、その後、寄稿者や情報提供をしていただいたみなさんの多大な協力と時折担当課に寄せられる読んでいますよ」といった内容の手紙や電話に励まされ、今日まで続けることができました。

「海老名むかしはなし」のコーナーは、最初のころは、紙面に変化を与えるという役割から発展して、その後思いもかけない使命と期待を担うことになったのである。

「海老名むかしはなし」のコーナーは、最初のころは、紙面に変化を与えるという役割から発展して、その後思いもかけない使命と期待を担うことになったのである。

